

第1部 京都府環境施策の新たな動き

第1章 京都の魅力を支える里地里山の保全と利活用に向けて ～生物多様性未来継承プランの策定について～

1 これまでの京都府の生物多様性* 保全に関する取組と京都府生物多様性地域戦略の策定

京都府ではこれまでも、希少種の保全等のための条例の制定、**外来生物***の駆除や根絶に向けた対策、**レッドデータブック***や外来種データブックの作成、国定公園や自然環境保全地域の指定など、府内の生物多様性の保全に関する取組を行ってきました。

しかしながら、府内における生物多様性保全に関する取組は体系的に整理されていない部分もあり、様々な課題を整理しその対策を効果的に推進するために、京都府では府内の生物多様性の保全と持続可能な利用を定めた総合的な基本計画として、平成30年3月に「京都府生物多様性地域戦略」を策定しました。

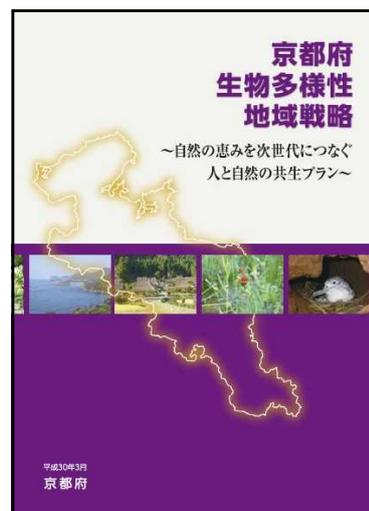
同戦略では2050年を目標年とし、「従来の生態系維持・回復対策に加え、多様な主体が積極的に関わる共生型の保全・利活用を進める」ことを目標としています。

また、今後10年間に取り組むべき行動として、現下の課題に即応する次の対策を実施することとしています。

- (1) 森里川海のつながりの回復による多様な生態系の保全
- (2) 人の積極的な関与による里地域の再生
- (3) 早期対策による外来生物の脅威の排除
- (4) 生物多様性を未来に受け継ぐための知見の集積、人材育成

(京都府生物多様性地域戦略の詳細はこちら → <http://www.pref.kyoto.jp/shizen-kankyo/senryaku.html>)

図1-1 京都府生物多様性地域戦略



2 生物多様性未来継承プランの策定（30年12月）

今後の京都府における生物多様性保全の取組をさらに着実に進めていくために昨年度に策定した京都府生物多様性地域戦略では、4つの主要な行動計画のひとつに「生物多様性を未来に受け継ぐための知見の集積、人材育成」を掲げ、府内の生物多様性に関する情報収集の強化、生物多様性保全の気運醸成に向けた取組を位置づけています。

そして、その中でも特に重点的に取り組むべきリーディングプロジェクトとして、「自然史情報の収集・利活用・継承を担う生物多様性センター（仮称）の設置」を挙げています。

生物多様性保全の施策を的確かつ効果的に進めるためには、まず何よりも、生物の分布状況や生息環境のデータといったエビデンス（証拠・根拠）に基づいた施策立案が不可欠です。そこで、そうしたエビデンスとなる情報に関するアーカイブを整備すること（データベースの構築など）、それらの情報を様々な分野の関係者が利活用し連携・協働して生物多様性の保全を進めることを目的とし、京都府では30年12月に「生物多様性未来継承プラン」を策定しました。策定にあたっては、これまでの取組の経過や京都府生物多様性地域戦略を踏まえるとともに、生物学だけでなく、環境経済や公共政策、教育、文化財など、幅広い分野の有識者による検討委員会を計4回開催し、様々な角度から検討を行いました。特に、以下の5つの項目について議論し、論点を整理・集約しました。

【課題の認識】

- (1) 里地里山の重要性について

プランにおいて特に重要な対象とされたのが、「里地里山」と呼ばれる地域です。里地里山とは、一般的には、都市と奥山の間位置し、農林業などを通じて人の手で管理されてきた地域のことです。集落とその周囲の森林、農地、ため池、草地などを含めたエリアを指します。

人々は日々の生活の中で里地里山を適度に利用し、その環境を維持してきました。また、生きものたちも長年の間にその環境に適応し、その地域に固有の生物多様性が育まれてきました。京都の自然はその多くを里地里山が占め、その生物多様性は京都の暮らしや伝統・文化・産業の基盤となっています。

京都は古くから続く大都市を擁しながら、極めて豊かで独特の生物多様性が守られています。京都市には天然記念物に指定された貴重な生物群集が存在する深泥池があり、市街地にも希少種の蝶・キマダラルリツバメや珍しいコケ類が生息しているほか、広大な社寺林が信仰の対象として守り続けられてきました。大都市と生物多様性が長年にわたって共存してきたことは、世界に誇るべき京都の大きな特徴と言ってよいでしょう。山城・丹波・丹後の各地域も、衣食住や文化に関わる生産物を通して消費地である都と繋がり合い支え合ってきた中で、それぞれ独自の地域文化や生物多様性を育んできました。

以上のように京都の歴史と暮らしは生物多様性と切っても切れない関係にあり、従って、里地里山の生物多様性を保全することは、京都の魅力、「京都らしさ」を守り育てることに繋がるのです。

図 1-2 市街地に隣接しながら貴重な生物群集を残している深泥池（京都市）



図 1-3 人と自然の共生の結果生み出された里山の風景（美山かやぶきの里：南丹市）



図 1-4 キマダラルリツバメが市街地で見られるのは非常に珍しい（哲学の道：京都市）



図 1-5 賀茂御祖神社（下鴨神社）とその境内に広がる「糺の森」（京都市）

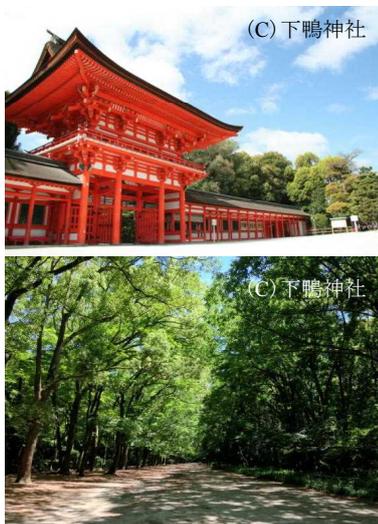


図 1-6 水田も多くの希少な生物たちの宝庫になっている（袖志の棚田：京丹後市）



(2) 里地里山の危機

このような貴重な京都の里地里山ですが、近年、人々のライフスタイルの変化や農山漁村の過疎化・高齢化の進行により、森林の管理放棄や耕作放棄の増加、農林水産業の方法やあり方の変化などが進み、里地里山の生物多様性は大きな影響を受けています。生物多様性への配慮が不十分な開発行為や、ニホンジカ・イノシシなどの鳥獣、外来生物の分布拡大も生物多様性の減少に拍車をかけています。

生物多様性の減少は我々の暮らしや文化にも影響を及ぼし始めています。例えば、林業の衰退により北山杉の生産地などで森林の管理が行き届かなくなり、景観の悪化が借景などにも影響を及ぼすとともに、林内の生物多様性の減少を招いています。森林の荒廃は土砂災害や洪水のリスクを高めるとも言われています。祇園祭や葵祭で使用するチマキザサ、フタバアオイなどの植物も激減しており、京都市内での供給が難しくなっています。京料理の素材であった川魚も、大きくその数を減らしました。生物多様性の減少による影響はこのように多岐にわたります。

図1-7 チマキザサから作られる祇園祭の「厄除け粽」



図1-8 葵祭で社殿や行列の装飾に使われるフタバアオイ



図1-9 多様な主体との協働により京都の森林を守り育てる「京都モデルフォレスト運動」



【課題の解決に向けて】

(3) プラットフォームの設置

このように危機に瀕し始めている里地里山の生物多様性を保全するためには、人間が手を入れることによる環境の維持・管理が不可欠であり、そのためには里地里山の自然資源の利活用を進める必要があります。里地里山の自然資源にはどのようなものがあるか（シーズ）、そしてそれらにはどのような需要が考えられるか（ニーズ）を調査発掘し、その間でマッチングを行うことで、保全と利活用の適正な循環を進めることを目的とし、本プランでは、様々な分野（観・商・農・環など）の関係者がアイデアを出し合うプラットフォーム「人と共生する京都生物多様性推進会議」（仮称）を府民協働により立ち上げ、プラットフォームで生まれたアイデアや事業により、京都府生物多様性地域戦略を具体的に進めていくこととします。

(4) アーカイブ機能の構築

上記(3)のプラットフォームで地域の自然資源についての議論を行う際には、地域における生物の生息状況や環境に関する情報（エビデンス）が不可欠です。

科学的根拠に基づいた施策の提案を可能とするため、府内の生物多様性情報（生物の分布状況など）に関するアーカイブを構築することとします。

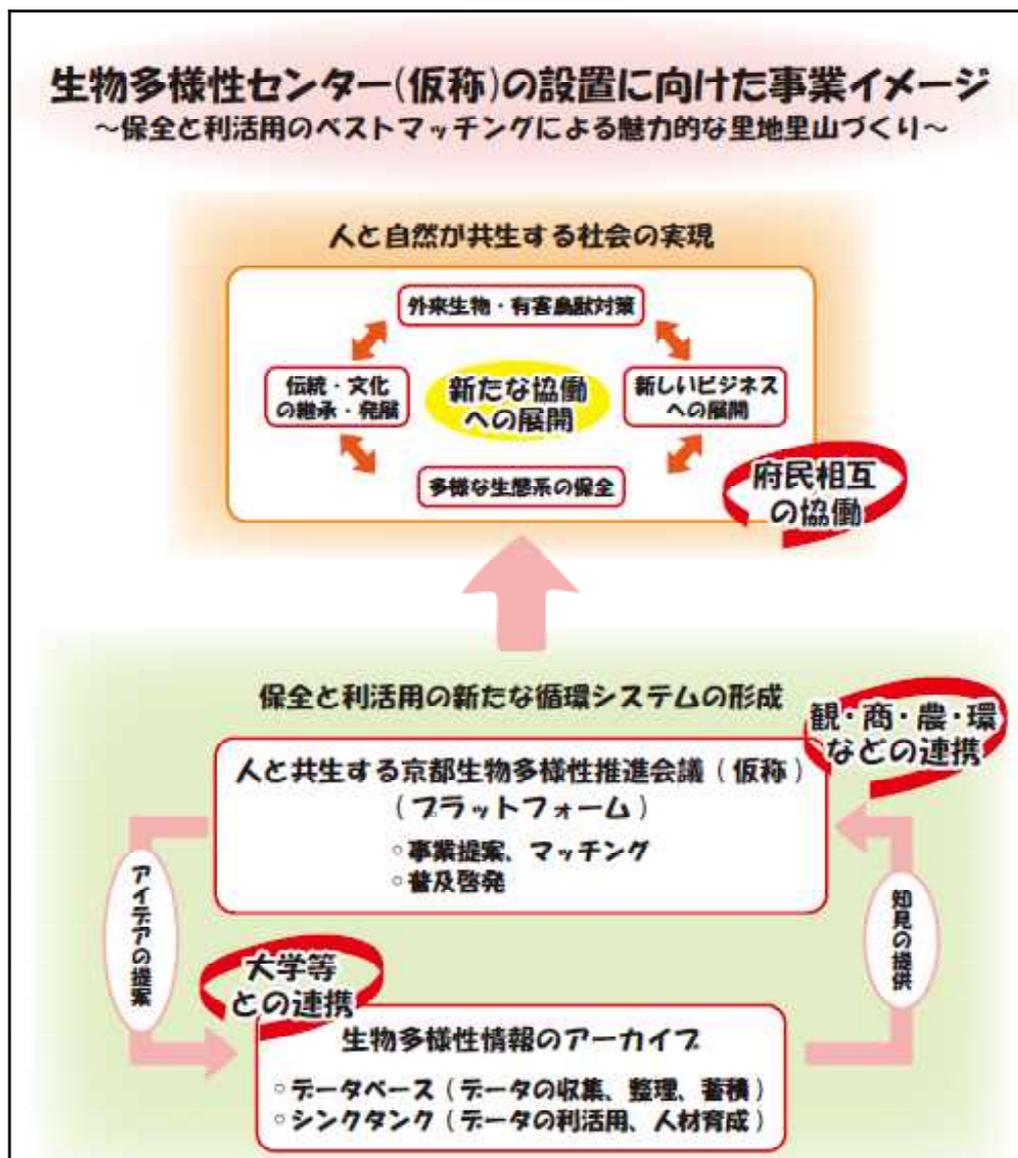
(5) 生物多様性センター（仮称）の設置を目指して

上記(3)、(4)の機能を発展させ、自然史情報の収集・利活用・継承を担う「生物多様性センター（仮称）」の設置に向けた検討を進めます。

京都府立大学をはじめとする大学・研究機関や、京都府立植物園など既存の関連施設、各地の拠点などとの連携による上記機能の構築を検討します。また、情報の集積・分析の過程を通じて

人材が育成されるようなスキームができるようにします。

(生物多様性未来継承プランの詳細はこちら → https://www.pref.kyoto.jp/shizen-kankyo/news/documents/plan_1.pdf)



3 今後の展望

京都の里地里山の保全、ひいては京都ならではの暮らしや伝統文化を守るため、「生物多様性未来継承プラン」を推進し、生物多様性センター（仮称）の設置とその機能の拡充を目指します。

生物多様性情報の基盤を充実し、その情報を分析、利活用します。情報が十分に蓄積されていれば、有害鳥獣や外来生物の分布拡大の予測、希少種を保全する上で重要な地域の予測などを行い、先手を打って予防的な対策や保全活動を実施することが可能となります。情報を活かしたグリーンインフラへの提案により、防災・減災に資することも考えられます。また、地域の自然資源の保全と利活用のマッチングも、これらの情報を活用することで効率的に進められると考えられます。

里地里山の生物多様性を次世代に継承していくためには、単に生物を保護するだけでなく、農林漁業の振興や地域の活性化も重要です。また、人口減少、野生鳥獣・外来生物、人々の自然離れなど、多岐にわたる課題にも取り組んで行く必要があります。

そのためにも、幅広い分野の様々な主体とより一層の協働・連携を進め、京都府生物多様性地域戦略でも目標とするところの「多様な主体が積極的に関わる共生型の保全・利活用」を一つ一つ具体化させ、実現していきます。